

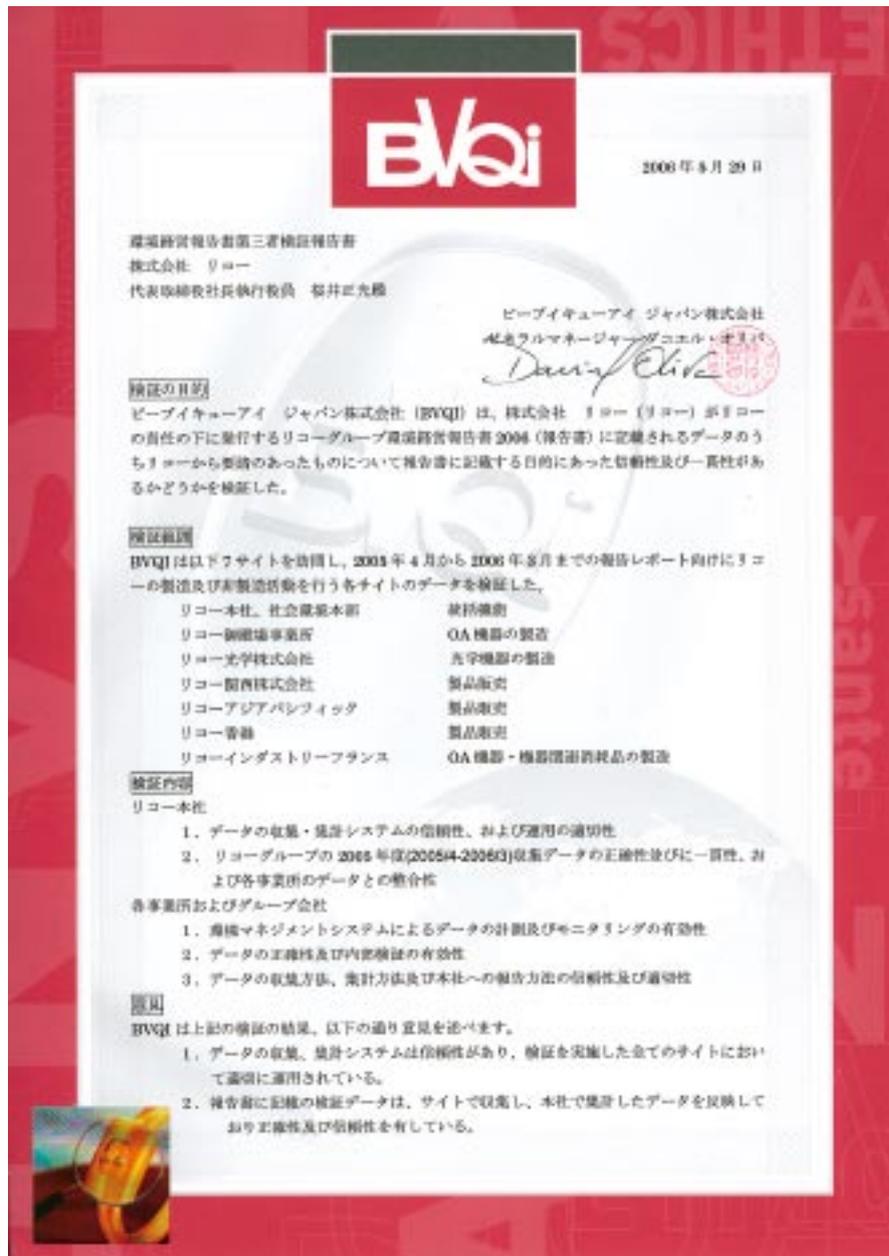
リコーグループは、環境パフォーマンスデータとその収集・集計システム（環境経営情報システム）について第三者検証を受審し、環境経営報告書を通じてステークホルダーの皆様へ情報を開示しています。また検証結果を環境経営の改善・進歩のために役立てています。2004年度からは「システム検証」の考え方を取り入れました。データ間の整合性に加えて、システムが信頼性の高いデータを収集・集計するために有効に機能しているかどうかを検証されています。今後も、第三者検証をより有効に活用し、継続的な改善を進めていきます。

参考所見

BVQIはリコー本社及び検証実施サイトのデータの検証過程において、その都度気付きや意見を報告してきた。それらの報告を含めた全体的な所見は以下の通りである。

1. 良かった点

- リコーが提唱するエコバランスは、客観的な基準を用いて全体の環境負荷を定量的に把握する優れた手法であり、そのエコバランスの対象範囲が年々拡大している。
- 各販売会社のデータは販売事業本部で集計された後本社に報告される。その販売事業本部で使用されている収集システムはルールが明確で、更に集計データは一貫性及び信頼性を有している。



2. 昨年の課題の改善状況

- 各サイトが一旦報告した環境データを修正する必要が生じた時、データベース上にサイトの責任者が承認した修正履歴が記録されるだけでなく、本社が常にその修正内容を確認できる仕組みが導入されている。
- 生産が増大する中で温室効果ガスの総排出量を削減目標に掲げている点は高く評価できる。また、計画的に総排出量削減のための施策が実施されている。
- 温室効果ガス排出量は、副生するCF4をシステム上で考慮するようにシステムが改良されたことに加えて、国際的に認められた算定方法、係数を使用するように変更されており、公表数値の透明性・信頼性が向上している。
- 環境会計の入力において税込み値を計上するミスがあったが、今年度も複数の事業所で同様の誤りが見られた。

■ BVQI 検証済データ一覧

ページ	番号	名称	検証番号
17	—	リコーグループ環境行動計画(2005年度～2007年度)/進捗状況(2005年度実績)	(1)
23	①	《日本》エネルギー消費量の推移 白黒複写機・複合機	(2)
	②	《日本》エネルギー消費量の推移 カラー複写機・複合機	(3)
	③	《日本》エネルギー消費量の推移 白黒プリンター	(4)
	④	《日本》エネルギー消費量の推移 カラープリンター	(5)
	⑤	《グローバル》QSU技術によるCO ₂ の削減量	(6)
27	①	《グローバル》再資源化率 複写機	(7)
	②	《グローバル》再資源化率 トナーカートリッジ	(8)
	③	《グローバル》回収実績 複写機の回収台数	(9)
	④	《グローバル》回収実績 トナーカートリッジの回収質量	(10)
28	①	前身機(新造機)と再生機のLCA比較(CO ₂ 排出量)※昨年度検証データ	(11)
31	①	《グローバル》製品の環境影響化学物質排出基準達成状況	(12)
35	①	国内リコーグループ(生産)の2010年度に向けてのCO ₂ 排出総量削減目標達成のシナリオ	(13)
36	②	《日本》エネルギー使用量 リコーグループ(生産)	(14)
	③	《日本》エネルギー使用量 リコーグループ(非生産)	(15)
	④	《日本》主要なエネルギーの使用量内訳 リコーグループ(生産)	(16)
	⑤	《海外》エネルギー使用量 リコーグループ(生産)	(17)
	⑥	《リコーグループ全体》CO ₂ 以外の温室効果ガス排出量(CO ₂ 換算) リコーグループ(生産)	(18)
	39	①	リコーロジスティクスの輸送におけるNO _x 、SO _x 排出量
42	①	《リコーグループ全体》廃棄物総発生量 リコーグループ(生産)	(20)
	②	《リコーグループ全体》水の使用量 リコーグループ(生産)	(21)
	③	《日本》廃棄物再資源化率/総発生量/総排出量/最終処分量 リコーグループ(生産)	(22)
	④	《日本》廃棄物再資源化率/総排出量/最終処分量 リコーグループ(非生産)	(23)
	⑤	《海外》廃棄物再資源化率/総発生量/総排出量/最終処分量 リコーグループ(生産)	(24)
45	①	《リコーグループ全体》リコー削減対象物質の使用量・排出量推移 リコーグループ(生産)	(25)
	②	《リコーグループ全体》公害防止関連項目(NO _x 、SO _x 、BOD)の排出量推移 リコーグループ(生産)	(26)
48	①	リコーグループ国内生産関連事業所 地下水汚染調査結果と浄化状況(2006年3月現在)	(27)
	②	リコーグループ海外生産関連事業所 地下水汚染調査結果と浄化状況(2006年3月現在)	(28)
53	—	事業活動全体のエコバランス	(29)
57	—	2005年度 リコーグループのコーポレート環境会計	(30)
77	—	サイト別データ	(31)

3. 今後の課題

- 環境データの入力時に、前月あるいは前年と比較して数値変動が大きい場合に、注意を喚起する仕組みがあるとよい。更に、変動の原因を記録するとよい。
- 環境会計の分類基準及び集計基準について、サイトによって一部認識が異なっていた。基準の再確認と各サイトにおける一貫した且つ同等な会計の運用が必要。

- エコバランスで考慮される範囲は、原則として海外における原料の採掘から製品の廃棄までであり、公的に利用できる原単位を検討の上使用しており、報告数値の透明性および信頼性は高い。しかし、一部の原単位は輸入通関後のデータしか公表されておらず、結果として、エコバランスで考慮する範囲を揃えられずにいる。今後、輸入前の段階を反映した原単位が利用できるようになった段

階で、その原単位への更新をし、集計データの範囲を再編成することでさらにデータの信頼性が向上する。